



写真d : アツケシソウ近景

のであるが、この植物が温暖な瀬戸内海沿岸にも生育していることは非常に興味深いことである。といっても瀬戸内では自然海岸での生育は皆無であって、塩田という特殊な環境のもとでの生育である。

現在、製塩は工業化されてしまったが、塩田による製塩が行われていた1971年以前では、アツケシソウは塩田雑草として多くの浜で見られ、香川県では屋島塩田の群生地が県の天然記念物にも指定されていた。ところ

が100年とも200年とも、もっと古い所では400年とも云われる塩田の歴史がイオン交換膜法による製塩法の開発により1971年12月には閉じてしまった。アツケシソウの実態を把握するため、廃止直前に実施した香川県下37塩田の調査では、15の浜でアツケシソウの生育が確認された。しかし、塩田が廃止されると、アツケシソウの生育環境が消滅することは必至であり、当然、アツケシソウの絶滅は時間の問題だと思われた。しかしながら、塩田跡地は広大でしかも、塩田特有の海拔マイナス地区であるところから、直ぐに転用できず、放置されたままのところもいくつかあった。明日の見学地である木沢塩田跡地もその一つである。この木沢塩田には、1971年の調査時に、アツケシソウは生育していなかった。この塩田で私は、調査時に他で採種して持ち歩いていたアツケシソウの種子をこぼしてしまった（といっても、実は故意にしたことだったが…）。数年たつて、木沢浜でアツケシソウの大群落を発見したとの報せを受けたとき、当時を思い起こし、まさかと思った。そして、アツケシソウを確認したとき、一緒に調査した香川大学の国分教授とはくそ笑んだものだった。後で耳にしたが、他にも何人か、そんな不屈き者がいたらしい。

「水名学入門」の紹介

1. 雑誌「言語」（大修館、昭和60年7月号、p.72～76）に、比較言語学者家村睦夫氏が「水名学入門」という論考を発表されています。

内容項目：1.水と関係ある地名。2.透明なる名前と不透明なる名前。3.古代ヨーロッパの水名。4.意味から見た水名。

2. 「水名」とは。

家村氏曰く“……熱川（アタカワ）とか琵琶湖……これらの名前をGewässername（またギリシャ語の水の名前を表わす語からHydronym英語も同じ）と呼びます。日本語にはこのような河川名や湖沼名をひっくりめた呼び名がないため、この語を聞きなれないことばですが、「水名」と訳しました……”

3. 水草の研究にかかわる者として、陸水学そしてこの「水名学」など、水界・水圏について広く知識をもつことは有意義であると思いたします。

4. 氏は、こうも述べています：“…水名はいろいろな理由からつけられるものようです…Djúpá（深い川）、Brunná（泉の川）、Leirá（泥川）、Morsá（魚の群の川）…日本にも同じような名前がいくつでも見つか

りそうです。ちなみに、aはゲルマン祖語*akwo、さらに印欧祖語*akwa（水）に由来します。（日本語の「関川（アカ）」も同源です）……” [*は発音上の記号]。

aquatic plantsをはじめ、aquarium、Aqualung、aqueous solutionなどなど身近かな言葉がたくさんあります。

5. 全国にアカという名のついた地名があります。名古屋市内に赤塚という漢字表記のところがあります。水にちなんだ地名だと説く人がおりました。

しかし、そもそもアカと発音される日本古来（やまと言葉）の音声は、赤系統の色とか明るいという意味のようです。

6. 赤という漢字名のついた池沼や川があります。泥土が赤褐色なので、赤という名がつけたのか。明るいとか鮮やかなの意味ではないようです。バクテリア生理化学者の方から聞いた話では、その泥土には鉄バクテリアが大量に生育しているとのこと。

北海道南部、駒ヶ岳の近くに赤井川という小さな川があります。泥土に鉄バクテリアが居るかどうか、また川の酸性度のことも知りません。水生植物は、きわめて貧弱で、せいぜいヤナギモが細々と生えているだけでした。

（8月 原田市太郎）